




東北大学附属図書館報 **木這子**

BULLETIN OF
THE TOHOKU UNIVERSITY LIBRARY

URL <http://www.library.tohoku.ac.jp/>

木這子(きぼこ)とは東北地方の方言で、こけしのこと。小芥子這子(こけしぼうこ)

目 次

○ 漱石文庫の保存修復 A Restoration for the Books of SOSEKI-Collection...1	○ 平成18年度東北大学附属図書館企画展 「江戸の遊び」を終えて.....21
○ 国際シンポジウム「求められる図書館サービスと スタッフ・ディベロップメント」開催報告.....10	○ 「もてなしの心」がこもる展示会：平成18年 度企画展『江戸の遊び』評.....22
○ 平成18年度東北大学図書館職員総合研修会報告...13	○ 連載「江戸の遊び～けっこう楽しいエコレジャー～」 を巡る話題から(1)：季節の楽しみ.....24
○ 平成18年度大学図書館職員講習会を受講して.....14	○ アンケートの協力.....27
○ 平成18年度学術情報リテラシー教育担当者 研修参加報告.....15	○ 国立大学図書館協会理事会開催.....28
○ 平成18年度NAIST電子図書館学講座を受講して.....16	○ 会 議.....28
○ 「江戸の遊び - けっこう楽しい エコレジャー - 」開催報告.....17	○ 人事異動.....30
	○ 編集後記.....30

漱石文庫の保存修復

A Restoration for the Books of SOSEKI-Collection

学術資源研究公開センター助手 小 川 知 幸

ルーヴル美術館の収蔵品のほとんどが、何らかのかたちで修復を受けている。

はじめに

平成18(2006)年5月、漱石文庫の漱石旧蔵書数点の保存修復が終了した。本事業は東北大学附属図書館(本館)とアトリエ・スズキの協力により昨年度から進められていたものであり、限られた時間と予算の範囲内での計画ではあったが、その成果は、多数の漱石研究者ならびに愛好家の意に合うものになったと自負して

いる。この事業は本学のみならず全国大学図書館にとって一種のモデルケースとして蔵書の保存・修復対策に資すると信じ、ここに、修復までの経緯とその具体的な作業の過程を報告しておきたい。漱石文庫は、一人の作家の旧蔵書でありながら、その一次史料としての関心度はきわめて高く、現在も閲覧申し込みや展示会などへの貸し出し要請が陸続として絶えない。した

東北大学附属図書館

がってその保存修復事業は、通常の書籍にたいするたんなる保存手当ての範囲を超え、いわば文化財修復という性格を帯びたと考えるからである。

古典資料等修復保存小委員会の発足

およそ2年前の9月、本館では貴重図書等選定委員会のもとに古典資料等修復保存小委員会が発足した。本館の所蔵する多数の貴重資料には、長期にわたる利用の結果として、物理的破損や経年劣化が目立ってきていた。このような資料にたいして、たんなる補修ではなく、抜本的な保存修復の措置を採らねばならないということが、ここ数年来、館員の間で意識されていた。わたしもこれまでの西洋古刊本の研究や目録作成の経験から、洋書担当の委員としてこれに参加することが決まった。とはいえ、発足した小委員会の名称が、「保存修復」ではなく、「修復保存」となっているのは、当初、修復と保存の対策が予算的に別立ての柱で考案されていたからである。

一方で「保存修復」は、とくに漱石旧蔵書にたいするわたし自身の限定的な概念であることを予め断っておきたい。19世紀後半の洋書を中心とする漱石旧蔵書は古刊本（Old Books）というには新しすぎるが、かといって取り替えの利くものでもない。資料にそくした特別な方針を立てねばならないことは早い段階から予期されていたのである。

さて、小委員会の発足を後押ししたのが、平成16（2003）年の三陸南地震（5月27日）と宮城県北部地震（7月26日）の二度の地震である。いずれも震度6を記録した大地震であった。さいわい本館に目立った被害はなかったが、宮城県図書館では書架が破損して数万冊の図書が床に散乱する事態となったことは記憶に新しい。貴重資料のあるべき保存環境整備を検討して上位委員会に提言すること、これが当初の小委員会の重要な任務であった。

ところが、こうした意識を覆す出来事があった。2005年8月16日、そのとき研究旅行のため、たまたまドイツを訪れていたわたしは、同日早朝のTVで（時差が7時間）三度の地震に揺れ

る仙台駅のペデストリアンデッキを観るようになった。本館ではおよそ三千冊の図書が落下した。漱石文庫を含めた貴重資料もその例外ではなかった（『木這子』第30巻第2号）。

修復の基本方針

これにより、修復の対象は優先的に漱石文庫の旧蔵書に限定された。すでに経年劣化が進んだ箇所には物理的な衝撃が加わり、緊急度が増したためであり、また、貴重資料がおかれている現状を広く知らしめる「戦略的」な意味合いもあったといえる。

漱石旧蔵書を実際に手にとり、その書き込みの跡を目にした者はたいてい、最初は作家の聲咳に接したように感激するが、つぎの瞬間にはそれがひどく痛んでいることに落胆するという。旧蔵書の約7割は洋書であるが、その大部分はポケット版や6ペンス版、今日でいえば文庫や新書にあたるような廉価版で占められているのである。「もともと造りが安手のうえに愛読を重ねた結果、ついには出版時の状態がわからないほどボロボロになってしまったものもある」（飛ヶ谷美穂子氏「漱石の愛読書」）。

飛ヶ谷氏は、別のところで、「できる限り元の状態に保存・修復することが望ましい」と提言している（「書き入れは語る」）。しかし、はたして元の状態とは何であろうか。そして、いったいどの時点のことを指すのであろうか。漱石旧蔵書が仙台に移送され、移管手続き（登録）が完了したのが昭和19（1944）年2月。これをもって本館の漱石文庫の成立とされるが、このとき大正5（1916）年12月の漱石没後からじつに28年が経過していた。なぜこのような長期間にわたって放置されたかという問題については先に譲りたいが、その間、蔵書は、芥川龍之介の「漱石山房の冬」（大正12年）でも知られるように、当時の早稲田南町の板敷き・畳敷きの各十畳二間の遺室にそのまま残されていた。「天上は張り換へなかったのかな」と、芥川は旧友のMに訊ねている。戦局の悪化にともなって、後に屋敷は空き家となり、昭和13（1938）年、小宮豊隆は、「家番を置いて閉め切つてあるために、風通しが悪く、鼠が暴れ、本が傷ん

でしやうがない」と嘆いている（「漱石二十三回忌」）。

そこで、わたしが立てた漱石旧蔵書修復の基本方針は、「漱石が生前に用いていた蔵書の状態にまで回復する」ということであった。

保存修復とは

通常、書籍の修復とは、まさしく^{オリジナル}出版時の状態を回復することにほかならない。ヨーロッパでよく見かけるのは、装丁をすっかり新しいものに取り替えた古刊本である。書籍はもともと書冊のままで売られ、装丁を施すのはあくまで「個人の趣味」であった。

しかし、漱石文庫はたんなる個人蔵書の集積ではない。稀代の読書家^{リーダー}であった漱石は、蔵書の4分の1以上に心おきなく書き込みをしている。閲覧のため来館する人々は、稀覯書を期待しているわけではない。漱石の手にした痕跡のある蔵書を探しに来るのである。その意味で漱石旧蔵書は、一回きりの歴史的存在としての性格を帯びている。だからその処置は復元であってはならず、現状への介入は最小限にとどめ、保存できる部分はそのまま保存する。しかし処置しなければいずれ書籍自体の構造が破壊され、破損・散佚が危惧される部分については、つぎの約束事のもとに介入が許される。

わたしはこれを「保存修復」と呼んでいる。

修復処置はあとで確認できるものとする

書籍の構造を変えることはできるが、基本的な外観を変更することはできない

修復前の状態に戻すことを前提に処置する

漱石が蔵書を「ボロボロに」したのならば、そのままであることを積極的に選択し、手を加えずに保存する。けれども、その原因が他にあるのならば、破損・劣化の（将来的）状態を構造そのものに介入しても取り除くよう努める。近年ダ・ヴィンチの壁画修復でも周知されるようになったが、これは予防的保存を含めた、文化財のための修復方法といってよい。（修復をめぐる哲学の書とも言うべきブランディ『修復の理論』（Brandi, Teoria del restauro, 1963）

がようやく邦語で読めるようになった。興味のある方は参照されたい。）

漱石文庫成立以後

より具体的には、19世紀後半以後の普及版ないし廉価本は、酸性紙と背固めの膠の硬化のために、経年とともに堅く脆く、砕けるようになるのだが、たとえば、膠を除去して背固めの方法を新しい科学的なものに取り替えてもよいということである。構造を変えることにより、本の開きは良くなり、背や本文ページに無理な負担がかからなくなる。あるいは本文を侵していた粗悪な裏貼りを除去すれば、それ以上のページの酸化・褐色化を防ぐことができる。

しかしながらむずかしいのは、どこまでが漱石生前の痕跡であったか、ということである。わたしは人文学的な情報と技術的な情報を交換するかのよう、複数の修復業者と討論を行うことになった。

現在の漱石文庫は設備の整った比較的良好な保存環境におかれているとはいえ、これは新館（2号館）の開館した平成2（1990）年以降のことである。文庫成立直後は片平本館（現在の史料館）の一階にケーベル文庫とともに収められており（小宮「漱石文庫」）、その後、中2階（2階への階段の上部空間を利用した3階）に移動して、「所狭しの裸電球（数個の40～60W）の環境下にあり」、「利用可能な保存状態ではなかったような感じ」であった、という（石垣久四郎氏談）。このとき片平本館は数十年来の旧造りの建物に増築も許されず、蔵書の重みで床はたわみ、書庫はどこもはち切れる寸前であった（「資料」『図書館通信』）。

昭和48（1973）年、川内地区に現在の本館が開館すると、漱石文庫はその地下書庫に移された。地上の天候に左右されにくい、安定した保存環境が提供できると信じられたからである。地下におかれたこの部屋（別置書庫）は、今ではマイクロフィッシュなどの保管庫になっている。それからさらにおよそ20年して本館裏手に2号館が開館すると、4階に貴重書庫がおかれることになり、漱石文庫を初めとする貴重資料はふたたびそちらに移された。

だが、戦中戦後にかけて、いくつかの漱石旧蔵書が「補修」を受けている。

ウォートン『英詩の歴史』(Thomas Warton, The history of English poetry, London, 1774-1781, 4 v.)は、第1巻と第4巻だけ、もとの装丁が失われており、みごとな厚紙装になってしまっている。これは漱石が留学時の日記に「Don Quixote、WortonノHistory等ヲ買フ。代価四十円程ナリ、頗ル愉快……」などと記し、「製本が『カルトバー』で古色蒼然として居て実に安い掘り出し物だ」と正岡子規に報告したものであるが、その装丁の半分は、もう存在しない。このような補修は数次にわたって行われたようであり、ウォートンにかんしてはおそらく1960年前後の図書館製本であると思われる。

時折、本館では、綴じの切れかけた図書がセロファンテープで補修されているのを見かける。驚くことに漱石文庫でもこのような補修方法が採られていた。現在ではこのような措置を正当化することが困難なのは言うまでもない。

オリジナルとは

いずれにせよ、漱石旧蔵書にとってオリジナルとは何なのか、歴史的な想像力が必要とされる。たとえば、高松塚古墳の壁画が破損する直前に元のままであったかといえ、そうではない。褪色してしまった部分もあれば、化学変化により過剰に赤みを帯びた部分もある。一方で古色を帯びることで風合いを増すことを計算して作られたものもある。書籍がそうであろう。使い込むほどに手に馴染み、革には脂が染みこんで柔らかく深みのある色になる。前世紀末にシステーナ礼拝堂のミケランジェロの壁画を洗浄するというので大きな論争となったが、絵画にも暗色を帯びることを計算して塗られたワニスがあるという(洗浄論争についてはコンテ『修復の鑑』を参照)。

日本人の頭で考えるならば、民家の梁や柱が人が住むことで黒褐色に変化し、その艶を増すことを、まさか劣化したとは言わないだろう。

このように、修復は技術の問題であると同時に人文学的な問題でもある。ところがモノには

寿命があり、漱石旧蔵書はその想定された使用期間がとくに短い。この時点を折り返せば、文字通りの劣化が始まる。わたしは、漱石旧蔵書の顕著な劣化は、長く利用されなかった期間に損傷を受けたことが最大の原因だと考えている。

漱石文庫の成立まで

なぜ漱石の旧蔵書はかくも長く放置されたのだろうか。小宮は、「せめて蔵書だけでも先にどうにかしたい」。しかし「是を今、例へば何所かの図書館に寄附し、一纏めに漱石文庫として、人人が読めるやうにしてもらふ事が出来るとしても、さうして蔵書を取り去つたら、先生の書齋は齒の抜けたやうなものになつてしまふだらう」。「蔵書の處分という事は、先生の家、もしくは書齋を保存する方法が、どうしても立たない場合になって、初めて考へべき問題で、こつちを先に考へるのは、寧ろ本末顛倒と言はれべき事であるのかも知れない」と述懐している(「漱石二十三回忌」)。漱石の高弟・小宮にとっては漱石の住んだ家を丸ごと保存しなければ保存したことにはならなかったのである。

ところが、九日会(漱石の毎月の命日に山房に集まる門人たちの会)では意見もまとまらず、財源に心当たりもなかった。鏡子夫人は松岡讓(漱石門下で、長女筆子と結婚していた)の勧めもあり、すでに大正12(1923)年11月に山房を九日会に移譲することを申し出ていた。関東大震災による被災がきっかけになつたらしい。しかし、二度の集まりでも議論に収拾がつかないことについて夫人が激怒した。

松岡がこう書いている。

「とうとう義母が堪らなくなって怒り出した。『山房百年のため、いつまでも一夏目が私蔵しているより、一番因縁の深い皆さんに貰ってもらい、一等よい保存の方法を講じて頂いたがよいと松岡がしきりにいうので、わたしも家族も賛成して、こんどこうやってお集まりを願ったのです。しかし、いくら集まって二日にわたって議論して頂いても、四の五の文句ばかりおっしゃっていて、一向^{けり}鼻がつかないじゃありませんか。そんな事なら、いっそ私が案を引っ込め

たらよいでしょう。二日間で皆さんの^{はら}肚がよめた以上、わたしの方から勝手ながら撤回させて貰います。皆さん、お忙しいところをどうも有難うございました。若い安部^{はかる}[恕]さん、今日は折角の日曜をわざわざおいで願って恐縮いたしました。』(「ああ漱石山房」)

その後も幾度となく話が持ち上がったが、そのたびにまとまらず流れてしまった。漱石二十三回忌の折りに小宮がなおも逡巡して呻吟しているとおりである。しかし昭和19年、松岡が疎開先の新潟に蔵書を運ぼうとしていた矢先に、「一ト足違いで東北大学にソックリ身売りされて運ばれて行ってしまった」。松岡は漱石門人であったが、姻戚関係にあったため親族側と門人側の板挟みになって苦悩した。彼にとってはその苦悩が実を結んだとはいいいがたい結果であったといえよう。翌昭和20(1945)年4月24日夜、カラになった漱石山房は東京空襲で灰燼に帰した。

ドキュメンテーション

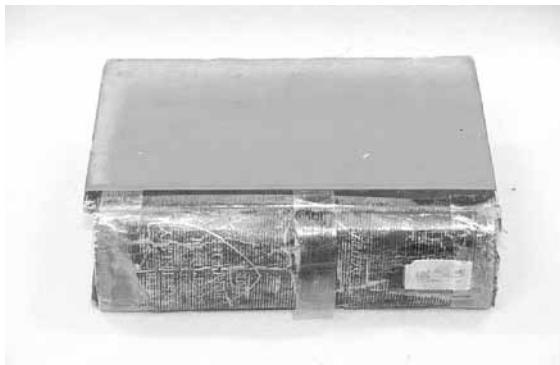
漱石旧蔵書のたどった歴史は大まかに如上の通りである。このようなプロフィールを踏まえ、個別具体的な保存修復の方法を決定する。資料の現状と論理的な修復方法を言語化することをドキュメンテーションと呼ぶ。

今回、修復対象として選定した旧蔵書はつぎの3点(4冊)である。

1. Scott, W., Sir, *The Ministrelsy of the Scottish Border*, Edinburgh : A. & C. Black, 1887. 2 v. ; 18 cm.

2. Shakespeare, W., *The Leopold Shakespeare* / with an Introduction by F.J. Furnivall, London : Cassel & Co., 1882. 1056 p. ; 21 cm.

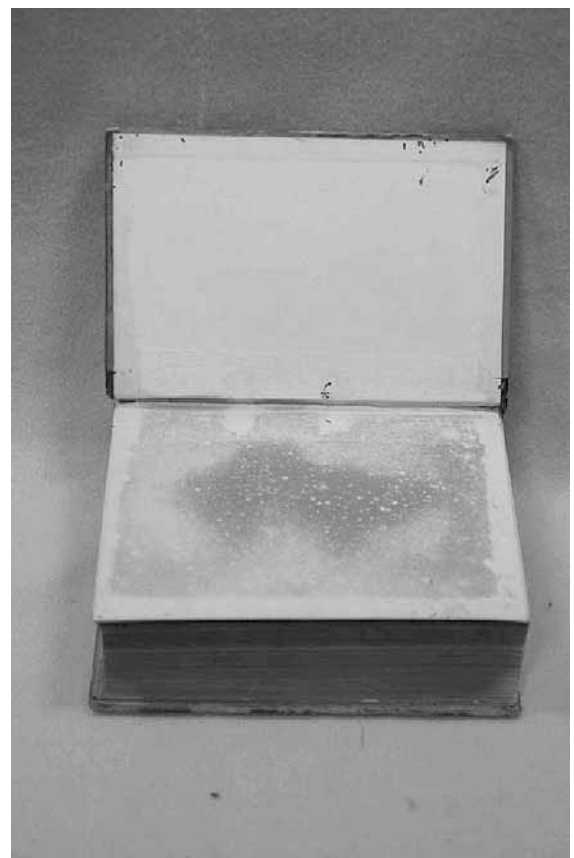
3. Smith, L. and H. Hamilton, *The international English and French Dictionary*, Paris : Ch. Fournant et Fils, 1875. 789 p. ; 25 cm.



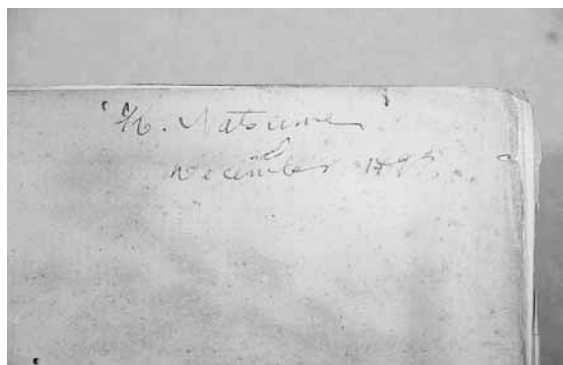
The Ministrelsy of the Scottish Border, vol.1
セロファンテープが貼られている



The Leopold Shakespeare
本文と背・見返しが切断している



The Ministrelsy of the Scottish Border, vol.2
裏貼りの酸性分によりページが褐色化



The Leopold Shakespeare 「K. Natsume
December 1893」の書き込み。26歳の頃か



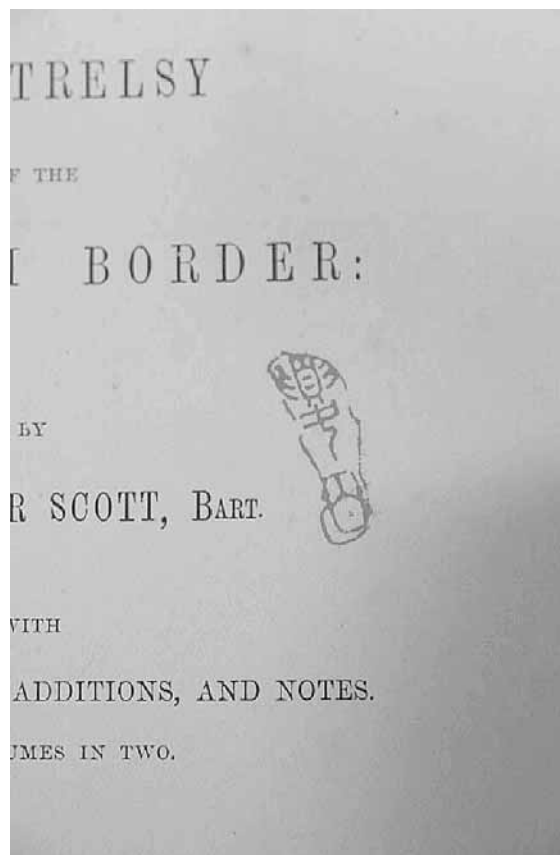
The Leopold Shakespeare 鼠による地の損傷

紙幅の都合により、ここでは3を除いた上の2点について略述する。いずれも19世紀後半に刊行された、機械漉きの木材パルプ紙より作られた普及版である。背の板紙が破損して装丁と本文が分離し（かけ）ていた。裏貼りの酸性紙によるページの褐色化、あるいは背の地の部分に小さくはない虫損（おそらく鼠による）があって、地小口が損傷しており、そこから破れの広がる可能性があった。

いずれも本文中に目立った書き込みはないが、2の遊び紙には、「K. Natsume / December 1893」の書き込み、また1（と3）の標題紙には「夏目」あるいは「漾虚碧堂圖書」という漱石の蔵書印が捺されており、修復作業にあたってはこれらの痕跡を確実に保護することを要請した。

修復作業

3社の修復業者と検討会に臨んだ結果、B社とC社の提示した保存修復プランは本館の要望



The Ministrelsy of the Scottish Border 「夏目」の捺印

を満たすには過不足があると判断し、こちらの要望にもっとも近い、きめ細かなプランを提示したアトリエ・スズキに依頼することに決定した。B社は、より美しく修復すること、C社は段階的保存に重点を置いた図書館らしいプランを提示したが、わたしの要望はいわば、「直さないで直す」ことであり、あの寒い貴重書庫で担当者をさんざんに悩ませてしまったことをこの場を借りてお詫びしたい。

さて、こうして、2006年の年明け早々に修復作業が開始されたが、鈴木英治氏には、作業開始後も資料を「解剖」して判明した事柄やそれにたいする所見、そして修復方針の提示をお願いし、修復後に変更された箇所については使用素材リストの提出と、実際に書籍から除去された部分の保存と返却を約束していただいた。

その後送られてきた修復方針は、大略以下のようなものであった。

- 背の柔軟性の確保。背貼りのボール紙を剥離し、

膠層を軟化させて除去、新たに柔軟で耐久性に優れた背貼りを行う。同時にタイトバックをホローバックに変更。

- 表紙小口の損傷（鼠）はそのまま残し、ボード断面の露出のみ楮紙で補強。
- 背は黒山羊革で表装しなおし、その上に元の皮革を貼り戻す。
- 表紙は損傷部を補修し、新規の表装に元の表紙を象眼して再利用。
- ジョイント部の構造に和紙による補強材を付加。
- クータを付加して表紙と本文との接合を強化。

クータとは背幅に合わせた筒状の紙で、これを付加することで本の開閉が助けられ、背の損傷やジョイント部にたいする負荷が軽減される。つまりは開きが良くなり、将来的な損傷を未然に防ぐ効果がある。普及版の本書は、現在の新書や文庫本のように、本文ページの丁が背に直接、糊（膠）で接着してあり（タイトバック）、この膠と背革の経年硬化により、ページを開くと背までいっしょに「バキッ」と折れるようになってしまう。ホローバックへの変更と併せて、保存のための積極的な構造への介入である。また、表紙の鼠が齧ったと思われる損傷は残す方向で対処した。笑い話のようではあるが、これが『吾輩は猫である』の鼠の跡ではないかと、修復方針をめぐってわたしは真剣に議論したのである。漱石の書齋には鼠が棲んでいた。生前の痕跡だとの疑いを拭いきれなかった

ためである。

以上は1. The Ministrelsy of the Scottish Borderにたいする方針を示したものであるが、2. The Leopold Shakespeareも修復方針はこれとおおむね同じである。しかし逆に、2の背の地部分の虫損については欠損の度合いが大きいこともあり、補修することにした。そのままでは本文の支持体としての役割をはたせなくなるということと、このような大きな穴が空くようになったのは、蔵書が利用者を失い、放置されるままになっていた期間以外には考えられないと判断したからである。

保存修復の終了

こうして、数カ月の作業期間を経て、平成18年5月に、旧蔵書3点4冊の保存修復は終了した。背の構造は変更して補強され、欠損部分は埋められ、残存部分も貼り戻された。むろんセロファンテープも慎重に除去された。全体をクリーニングして、特別にあつらえた、たとう式保存箱に収められた。

外観はあくまでも経年を感じさせるが、そうでありながら、いきいきとして、傍に所蔵者の存在を感じさせるものになった。思えば、これまでの旧蔵書は、漱石没後30年間の曇りガラスを通して眺められていたとはいえないだろうか。漱石文庫は、ようやくその本当の姿を現しはじめたのである。

修復により付加もしくは変更した部位の主要な素材・構造は、それぞれ以下の通りである。

1. The Ministrelsy of the Scottish Border

変更した部位	元の状態	変更後
表装用革	材質劣化、破れ、欠損、セロファンテープ	新規皮革により表装のやり直し セロファンテープの除去
背の接合状態	タイトバック	ホローバック
クータの付加	不明（おそらく無し）	厚口楮紙で製作、背に付加
支持体（麻のコード）	接続部が切断	リネンコードで補強
背貼り	無し	美濃紙と細川紙
背固め	大量の膠	最小限の正麩糊とEVA系接着剤
見返し内側	破損、切断	切断部を細川紙で補強
背の芯紙	印刷のある反古紙	A Fプロテクトハード

2. The Leopold Shakespeare

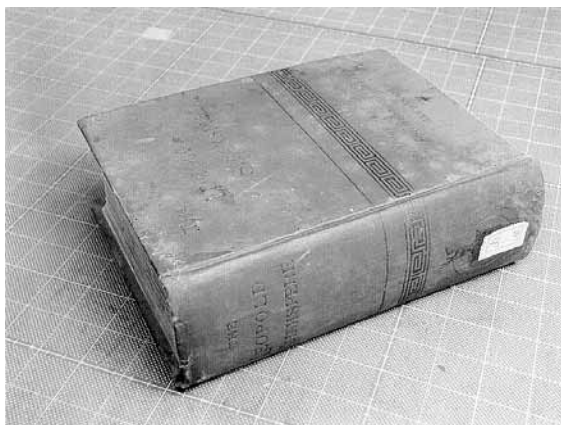
変更した部位	元の状態	変更後
表装用クロス	虫損、破れ、欠損	特厚の楮紙をアクリル絵具で染色し補修 背の芯紙はA Fプロテクトハードに変更
クータの付加	不明(おそらく無し)	厚口楮紙で製作、背に付加
支持体(麻のコード)	接続部が切断	リネンコードで補強
背貼り	薄手のストローボード	美濃紙と細川紙
背固め	大量の膠	最小限の正穀糊とEVA系接着剤
見返し内側	破損、切断	切断部を細川紙で補強
背の芯紙	やや薄手のストローボード	A Fプロテクトハード

3. The international English and French Dictionary

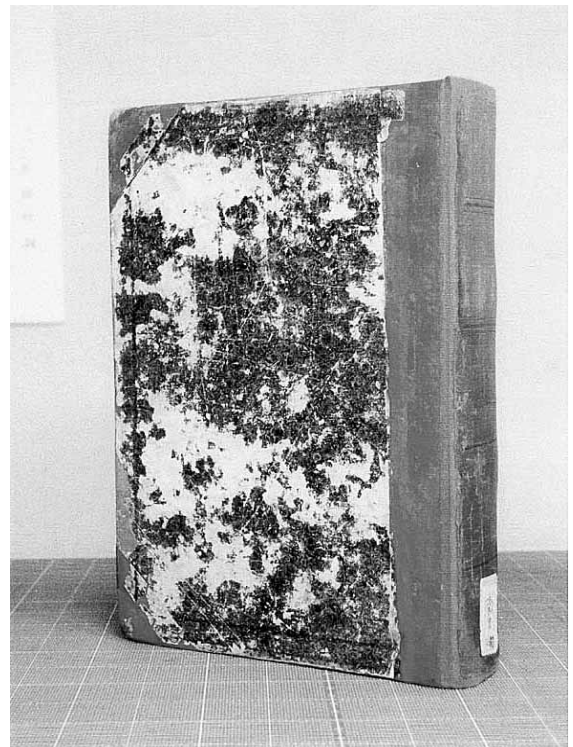
変更した部位	元の状態	変更後
背の表装用クロス	ジョイント切断、厚い芯紙	綿ブロード、アクリル絵具で染色
クータの付加	不明	厚口楮紙で製作、背に付加
支持体(綿(?)のテープ)	接続部が切断	新規製本用綿テープで補強
背貼り	厚い洋紙	美濃紙と自家製寒冷紗
背固め	大量の膠	最小限の正穀糊とEVA系接着剤
見返し内側	破損、切断	切断部を細川紙で補強
背の芯紙	不明(かなりの厚紙)	A Fプロテクトハード



修復の完了したThe Minstrelsy of the Scottish Border



同 The Leopold Shakespeare



同 The international English and French Dictionary

むすびにかえて

以上で、漱石文庫の保存修復についての報告を終えたい。

今回はさまざまな制約があり、ごくわずかな候補しか修復対象とすることができなかった。しかしながら、漱石の旧蔵書にたいして優先的に保存修復を行うという基本方針がまとまったことはさいわいであった。現在またつぎの修復プランに取りかかっているところである。できれば継続的事業となることを願ってやまない。候補はまだ多いのである。また、資料の修復だけでは保存対策の半分を行ったにすぎない。書庫・書架の耐震対策、管理のための人員配置、それらは費用のかかることであるが、実現が強く望まれる。それには漱石文庫の資料が秘蔵されるのではなく、なるべく多くの人目に触れること、研究者に適切に利用され、愛好者に観覧されることが必要である。今回の保存修復が、そのための一助となれば、これ以上の喜びはない。

最後に、修復事業の立案に始まり、折に触れてわたしを鼓舞してくださった本館情報サービス課長の白石さんと、写真撮影などの面倒な仕事を一手に引き受けてくださった同閲覧第二係長の菅原さんに謝意を表す。

主要参考文献

1. 漱石文庫にかんして

- 菊田茂男「『漱石文庫』についての基礎的研究」『宮城学院女子大学大学院人文学会誌』6、2005年
飛ヶ谷美穂子「漱石の愛蔵書」『図書』岩波書店、2001年10月号
同「『漱石文庫』逸聞考」『文学』岩波書店、2000年3・4月号
同「書き入れは語る」『漱石全集第27巻 月報28』岩波書店、1997年
石垣久四郎「漱石文庫目録の改訂更新リスト」『東北大学附属図書館研究年報』31・32、1999年
芥川龍之介「漱石山房の冬」『芥川龍之介全集』岩波書店、1995-1998年

原田隆吉「東北大学附属図書館『漱石文庫』の成立」『図書館学研究報告』（東北大学附属図書館）9、1976年

松岡譲「ああ漱石山房」『ああ漱石山房』朝日新聞社、1967年

小宮豊隆「漱石文庫」『人のこと自分のこと』角川書店、1955年

同「漱石二十三回忌」『漱石 寅彦 三重吉』岩波書店、1942年

「資料」『東北大学附属図書館月報 図書館通信』No. 2、1964年

『東北大学附属図書館報 木這子』第30巻第2号、2005年

2. 保存修復にかんして

チェーザレ・ブランディ（池上英洋、大竹秀実訳）『修復の理論』三元社、2005年

森直義『修復からのメッセージ』ポーラ文化研究所、2003年

アレッサンドロ・コンティ（岡田温司 他訳）『修復の鑑』ありな書房、2002年

日本図書館協会資料保存委員会編『災害と資料保存』日本図書館協会、1997年

国立国会図書館編『コンサベーションの現在 資料保存修復技術をいかに活用するか』（資料保存シンポジウム / 国立国会図書館編 6）、日本図書館協会、1996年

アンソニー・ケインズ 他（海野雅央 他訳・編）『「治す」から「防ぐ」へ 西洋古刊本への保存手当て ダブリン・トリニティ・カレッジ図書館における資料保存』日本図書館協会資料保存委員会編集企画（シリーズ本を残す 5）、日本図書館協会、1993年

鈴木英治『洋古書の保存 修復の原則と取扱・保存環境』Atelier Suzuki、[1993年]

相沢元子・木部徹・佐藤祐一『容器に入れる 紙資料のための保存技術』（シリーズ本を残す 3）、日本図書館協会、1991年

（おがわ・ともゆき）

国際シンポジウム「求められる図書館サービスと スタッフ・ディベロップメント」開催報告

総務課 情報企画係

平成18年11月18日（金）に、東北大学マルチメディア教育研究棟大ホールにおいて標記シンポジウムを開催しました。このシンポジウムは「平成18年度国立情報学研究所 教育研修事業 国際シンポジウム」として国立情報学研究所が主催し、東北大学附属図書館、広島大学附属図書館、大阪大学附属図書館が共催して実施したものです。会場も共催館のそれぞれにおいて実施され、東北大学が会場となった東日本会場では約80名の参加がありました。東北大学附属図書館の職員はもとより、北海道・東北・関東の各地区の大学図書館あるいは公立図書館、図書館業務関係会社等からの参加もあり、「図書館における人材育成」への関心の高さをうかがわせました。

当日の講演者と演題は次の通りです。

- Sue Dodd (ウプサラ大学図書館, スウェーデン)
「Roles and Identity : Staff Development at

Uppsala University Library」

- Liz Walkley Hall (フリンダース大学図書館, オーストラリア)

「Staff Development in University Libraries in Australia」

- Chie Emslie (オークランド大学図書館, ニュージーランド)

「ニュージーランドにおける大学図書館サービスと図書館職員の養成について」

講演後のパネルディスカッションでは、報告のあった各国での人材育成の取組みに熱心な質問が寄せられ、限られた時間ながら多くの意見交換を行うことができました。

当日の発表資料等については、以下のページから公開されています。

<http://www.nii.ac.jp/hrd/sympo2006/>



パネルディスカッション中の講演者



会場の様子

東北大学機関リポジトリシンポジウム開催報告

総務課 情報企画係

平成18年12月15日（金）に、東北大学機関リポジトリ「TOUR : Tohoku University Repository」の試行版開始の報告を兼ね標記シンポジウムを実施しました。会場は、この3月に完成したばかりの「片平さくらホール」を使用しました。交通の便が良い市街地にあるにもかかわらず、ガラスを多用した壁面にキャンパス内の木々が映って非常に美しい建物です。

当日のプログラムは以下のとおりです。

13:30-13:35	開会挨拶 ・倉本義夫（東北大学附属図書館副館長）
13:35-14:10	講演「機関リポジトリの現状」 村上祐子（国立情報学研究所 特任助教授）
14:10-14:40	報告「東北大学機関リポジトリ公開について」（システムデモ） 佐藤初美（東北大学附属図書館）
14:40-15:00	講演「機関リポジトリの役割-人文系・社会科学系分野の場合-」 秋永雄一（東北大学教育学研究科教授）
15:00-15:20	講演「機関リポジトリに期待するもの」 柳澤輝行（東北大学医学系研究科教授）
15:20-15:30	質疑応答 閉会挨拶 ・北村明久（東北大学附属図書館事務部長）

東北大学内で、図書館職員以外も対象とした機関リポジトリ関連のイベントは初めてだったこともあり、内容は村上助教授による現状報告から、TOURのデモ、教員サイドからの期待など多岐に及びました。

機関リポジトリは、各機関（大学）における学術研究・教育成果「本体（論文本文など）」を収集・提供しようというシステムで、教員側（コンテンツの提供者）からみた場合には以下のメリットがあります。

- ・自分の学術研究・教育成果が機関によって

恒久的に保存される。

- ・無償で公開することで、経済的な問題により商業出版社から提供される学術情報にアクセス不可能な状態にある研究者にも成果を届けることができる（より多くの研究者の目に触れる）

一方、利用者側（コンテンツの閲覧者）からみたメリットは以下のとおりです。

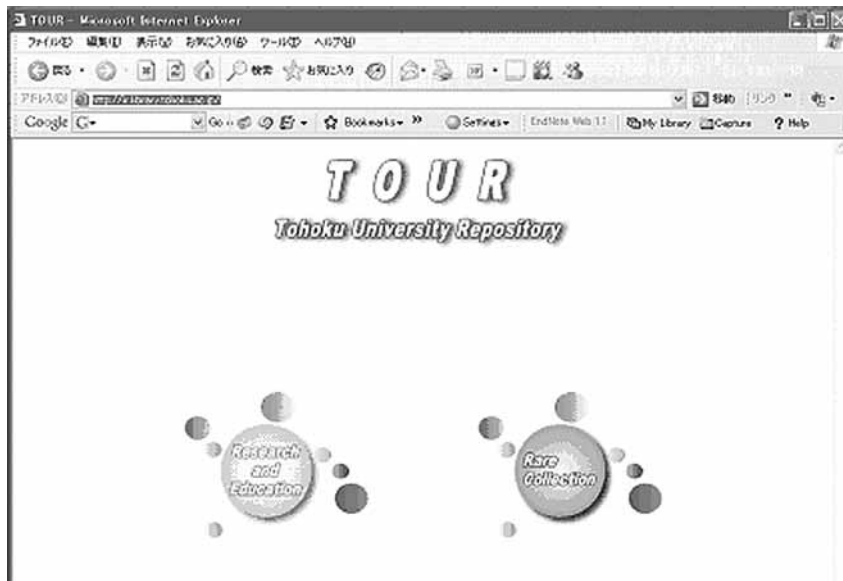
- ・特定の機関（大学）の成果を一覧することができる。
- ・一般の検索エンジン等からのアクセスも可能となる。
- ・経済的な負担がない。

現在世界中で800近い機関がリポジトリを立ち上げ、上記のようなメリットを最大限に生み出すための努力をしています。これらの機関が、それぞれに網羅的な収集・提供が行える状態になった場合、従来の商業出版社を中心とした学術情報提供のモデルに変化を与え、高騰する学術情報資源問題にも一石を投じることができる可能性を持っています。

シンポジウムには、学内外から50名近くの参加があり、後半の質疑応答でも活発な意見交換がありました。このシステムが持続して成長していくためには、今後学内の教員一人一人のご理解とご協力が欠かせません。附属図書館としては、この事業を順調に展開するため、これから寄せられるであろう多くの疑問・要望に一つ一つ応えてまいります。

試行版が公開された本学機関リポジトリ「TOUR」は、今後本格運用を目指してシステム及び収録コンテンツの整備を続けます。学内への広報活動も平成19年当初から計画的に実施する予定で、学内の教員等の意見を取り入れつつ、また先行する国内外の他大学機関リポジトリも参考にしながら望ましいシステムに成長するよう調整してまいります。

学内外の皆様のご協力をお願いいたします。



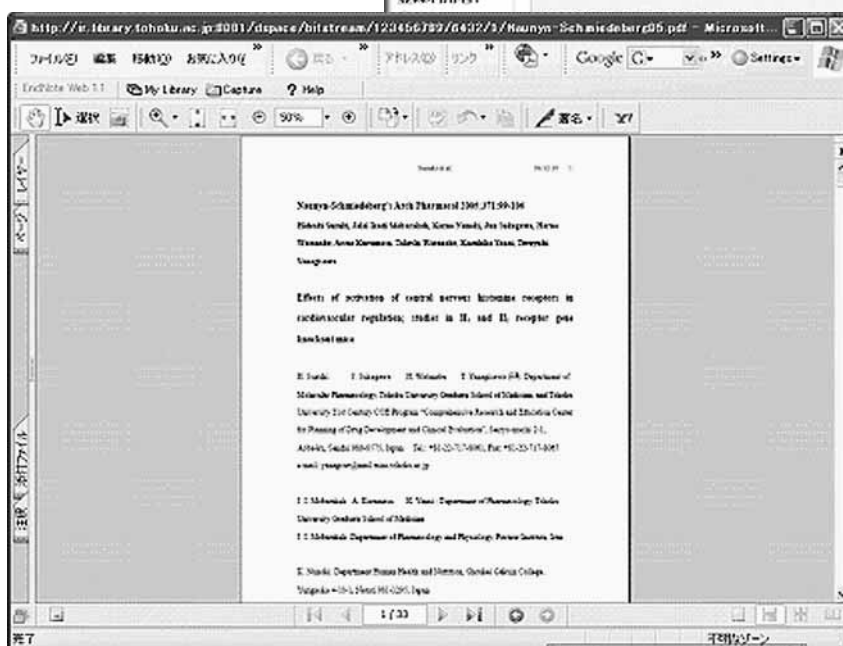
TOURトップページ

〔 Research and Educa-
tion 〕
学術論文・学位論文等

〔 Rare Collection 〕
貴重資料画像等



各カテゴリのページ



本文の閲覧が可能

平成18年度図書館職員総合研修会報告

総務課 情報企画係

平成18年12月22日（金）に、東北大学附属図書館職員及び東北地区図書館協議会参加館職員を対象とした標記研修会を開催しました。この研修は、図書館職員としてよりよい業務を行うために毎年テーマを設定して実施しているものです。

職員の削減等の影響もあり、参加人数は最近少なくなりつつありましたが、今年は、東北大学を含め7機関から57名もの参加があり、盛況のうちに終了することができました。

今年の講師と演題は以下のとおりです。

- ・ 大隅典子氏（東北大学医学系研究科教授）
「遺伝子を働かせて脳を活かす！」
- ・ 茂出木理子氏（お茶の水女子大学 図書・情報課長）
「脳を活かして図書館を動かす！」

今年は何かと「脳」が話題になった年でしたが、まず、遺伝子に働きかけて脳の活性化を促そうとする研究を行っている大隅教授からご講演いただきました。基本的な細胞の働きや遺伝子というものがどのような仕組みになっているのかという専門的な話題を、非常に分かりやすい例えを使ってお話いただき、学習や運動、または栄養によって脳を活性化させることができるという内容に勇気づけられた職員が多かったようです。また、日頃個々の研究者の具体的な研究内容を丁寧に伺う機会がないことから、このような優れた研究を行っている大学で図書館員として研究の支援ができることを誇らしく思う、というような感想も寄せられました。企画した側としては、今後も先生方の具体的な研究内容を積極的に知るようにし、大学図書館員としてできる研究支援とは何かを考え続けていかなければならないと感じました。

引き続き行われた茂出木課長の講演では、直前に行われた大隅先生の講演からもキーワードを引用し、図書館業務の中ではどのような考え方で仕事に臨めば良いかをお話いただきました。様々な職場での実体験に基づくエピソードや、男性が大多数を占める図書館の管理職の中での女性の働き方へのアドバイス、またリーダーに求められるものなどについてのお話には、参加した職員の中でも共感できる部分が多かったようで、自分の今の状態がまさに問題とされているので目からウロコが落ちるようでした、等の感想が寄せられました。



講演する大隅教授



講演する茂出木課長

今回は両講師には別々に講演依頼を出しましたが、演題を決めていく途中で本来別個の講演につながりを持たせることが可能になり、それが結果として研修会全体をまとめたものになったのではないかと思います。そのようにご調整いただきました両講師にはこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

また、これは偶然ですが配布資料が両講師とも今回はありませんでした。これも従来型の講演形式と異なり、自分で集中して聞かないと報告もできなくなるということで聴衆は熱心にメモを取ったり、顔を上げて講師を見ながら話の内容を捉えようとする様子が見てとれました。人の話を聞く場合の基本的な姿勢を思い出させてくれた良い機会だったと思います。

最後になりましたが、業務が多忙を極める中、職員の研修会参加に便宜をはかってくださいました関係諸氏に感謝いたします。

平成18年度大学図書館職員講習会を受講して

情報サービス課閲覧第一係 代 田 有 紗

平成18年11月14日（火）～17日（金）の4日間、東京大学において、「大学図書館職員講習会」を受講する機会を得ました。

この講習会では、機関リポジトリやアウトソーシング、学術情報リテラシーなど現在大学図書館界で話題となっている事柄に関する知識から、図書館員として仕事をしていく上で大切な心構えまで、幅広く学ぶことができました。今回の講習会で講師を務めてくださった方々は、皆、現在図書館の現場で実務にあたっておられる方ばかりで、その方々の実体験をふまえた講義はとてもわかりやすく、興味が持てるものとなりました。

また、講義の他に、2日間にわたって共同討議の時間が設けられており、様々な地域・規模の図書館に勤める方々と1つのテーマについて話し合うという、普段はなかなかできないような経験をすることができました。同年代の図書館員と知り合えた今回の講習会は、私にとってとても貴重な体験となりました。

今回の講習会で特に印象に残ったことが2つありました。1つ目は「場としての図書館の魅力をどのように利用者へアピールするか」ということです。電子媒体の資料やインターネットの普及などによって、図書館にさほど行かなくても必要な資料や情報を得られるようになった時代において、今後は、知的好奇心をくすぐる「場」としての図書館の魅力を積極的に利用者へアピールしていかなければならないのではないかと感じました。講義の中で、アメリカの大学図書館の事例“ Learning Commons（創造的

学習作業スペース）”を見ました。そこではまず勉強する環境があり、その周りに調べるための本があり、調査・研究をお手伝いするサブジェクト・ライブラリアンがいる、さらにカフェなども併設してある - これからの図書館に求められるのは、資料の収集・提供・保存はもちろんのこと、利用者のニーズにあった独自の図書館空間作りを行っていく必要があるのではないかと思います。

2つ目は「経営者の立場から今自分が行っている業務を語れるか」ということです。つまり、図書館が掲げているビジョンをしっかりと自分の中に取り込み、その視点から今自分が行っている業務を語れるかということです。このことは何人かの講師の方がおっしゃっていたことで、日々仕事をしていく中で、つい自分の身の回りのことばかりに目がいってしまっていた私にとって軽い衝撃がありました。図書館の予算やビジョンなど、図書館全体を常に意識した上で自分の仕事を行っていくという姿勢は、仕事する上での基本であるということに気付かされました。また、同時に、全体を意識することによって、今まで見えてこなかった問題に気付いたり、その問題解決の糸口が見えたりするのではないかと思います。今後はそういった姿勢を忘れず、自分なりのビジョンを持ち仕事を行っていきたいと思います。

最後に、講師の方々及び受講の機会を与えてくださった関係者の皆様に心から御礼を申し上げます。

（しろた・ありさ）

平成18年度学術情報リテラシー教育担当者研修参加報告

工学分館整理運用係 堀 野 正 太

平成18年11月8日～10日に国立情報学研究所にて開催された平成18年度学術情報リテラシー教育担当者研修会に参加しました。以下では3日間にわたる研修の内容を簡単に報告します。

本研修会の目的は「学術情報リテラシー教育を企画・運営し、利用者に対して学術情報を入手する方法についての的確な指導ができるようになる」というもので、研修が、現状把握 講習内容の作成法 実施方法という構成で行われました。

研修初日は情報リテラシー教育の現状について概観した後、先進的な事例の報告がありました。珍しかったのは亜細亜大学から報告された、学生が図書館ツアービデオを制作した事例でした（このビデオは亜細亜大学図書館のホームページ - <http://www.asia-u.ac.jp/lib/> で閲覧可能です）。ビデオ制作という手法については意見の分かれる所ですが、学生に図書館業務を知ってもらおうという試み自体は、単なる利用案内以上に図書館への理解を促すということから意義があるものだと思います。

2日目は講習会の内容作成の方法を考えるために、教員、図書館、プレゼンテーションのブロの3つの立場から「教える」ことについて講義がありました。いずれも有益な内容で、なかでも国際基督教大学での取り組みについての報告が大変参考になるものでした。紙幅の都合上、全てを書くことはできませんが、ポイントを挙げますと、自由参加型の講習会は労力が成果に見合わないので実施しない、広報は教員への売

り込みを主に行う、講習会では主・副担当を置き副担当が講習会後に必ず批評をすることで人材育成をはかっている、などです。個人的には「講師は必ずしも饒舌である必要は無い」という言葉に励まされました。

最終日は図書館オリエンテーションの実演および実施状況報告とプレゼンテーション技術の講義、最後に班別の討議がありました。ちなみに我が班は図書館講習会への参加者を増やすためには、まず図書館に親しんでもらわねばならない。そのために魅力的な場所となるように努力すべきだ、というシンプルな結論に達しましたが、具体的な方法までは検討できませんでした。

全国の大学から54名の図書館職員が参加した本研修会は、講義や討議の有意義な内容もさることながら、他大学担当者との意見交換の機会が与えられたことにも大きな意義がありました。どの大学でも共通する悩みを抱えていることを知り、これからどうしていくかを話し合うことが出来たので、今後業務へ取り組む上での心強い味方を得た気がしました。また一方で、本学の取り組みは他大学と比して多分に進歩的であることも分かり、先輩方の努力を誇らしく思ったことも付け加えておきます。

最後に、講習会実施関係者の皆様、業務が繁忙となる時期にもかかわらず快く送り出してくださいました工学分館の皆様に、この場を借りまして御礼を申し上げます。

（ほりの・しょうた）

平成18年度NAIST電子図書館学講座を受講して

工学分館整理運用係 小清水 裕子

去る11月21日から22日までの2日間、奈良先端科学技術大学院大学（以下NAISTと略）において標記講座が開催され、全国の国立大学高専などから合計17名が参加しました。

私の担当業務のひとつに、学位論文の整理があります。最近、学位論文を保管している貴重書室の容量が限界に達しつつある状況が懸案事項でした。それを打開するのは学位論文の電子化ではないかと思っている矢先の参加で、非常に興味を持ち受講してきました。

今回の講座では、電子図書館に関するシステム構築、電子化実習、著作権許諾手続きに関する講演だけでなく、現在電子化としての新しい動き「機関リポジトリ」システム構築の事例報告も聞くことができました。受講者の多くは、この「機関リポジトリ」の立ち上げに関わっていることが受講の動機だったそうです。そういう日常業務では味わえない、大学図書館界の大きな新しい動きを肌で感じる事ができたのは、常に新しい情報にアンテナを張るという意識に良い刺激になりました。

そして特に有意義だったのは、電子図書館立ち上げ当初から関わっているNAISTの砂原秀樹先生のお話を聞いたことです。現在電子化自体はスキャナと電子化用ソフトさえあれば、個人でもできてしまうほどに完成しているといえます。実際私が実習した電子化作業も、マニュアルのある簡単なものでした。問題はどのくらいの規模でやるかであって、大規模になればなるほど、どのような方針・体勢でそれを運営していくかをしっかり考えていかなければいけないのです。

東北大学附属図書館でも機関リポジトリが12月15日から動き出しました。その名も「TOUR」（Tohoku University Repository）。講座受講後にこの新しい事業を見つめてみたとき、これは大学の情報戦略を改めて問われるものになるという認識が非常に強くなりました。「リポジトリ」は研究活動や知的財産の単なる貯蔵庫としてではなく、研究成果の発信・交流の場、またその研究教育を支援する場としての役割も同時に果たしていけると期待しています。そのためには図書館はもちろん、事務部、教員や学生の方々など大学構成員全員で取り組む必要があると思います。NAISTでは構成員の距離が非常に近く、お互いの意見を吸い上げやすかったのが成功の秘訣だったと砂原先生がお話していました。「TOUR」も、東北大学の特色を生かしたものとなり、これからの大学活性化の一端となればと思います。

紙面を借りてですが、本講習会の関係者の皆さまをはじめ、受講の機会を与えてくださった関係各位に心から感謝申し上げます。

最後に、「電子図書館とは何か？」を体験するには、NAISTの図書館HPを見るのが一番だと思います。私の受講してきた講演や事例報告のアーカイブも早速アップされていますので、ぜひアクセスして体験してみてください。

平成18年度NAIST電子図書館学講座ページ
<http://library.naist.jp/library/dl-lab/eighth.html>

（こしみず・ゆうこ）

東北大学創立100周年 / 宮城県図書館創立125周年記念事業 平成18年度東北大学附属図書館企画展

「江戸の遊び - けっこう楽しいエコレジャー - 」開催報告

来場者数は12日間で3,380名。図書館主催の展示会としては稀にみる大盛況となった企画展について、観覧者のアンケート結果をもとに開催内容を振り返ります。



写真1：開会式（左から野家館長、圓山総長特任補佐、吉本総長、佐々木宮城県教育委員会教育長、伊達宮城県図書館長）

平成18年11月3日から14日まで開催された今年度企画展の大きな特徴は、宮城県図書館との共催です。両館の豊富な所蔵資料から精選した展示物は内容に厚みを持たせることとなり、また、館種の異なる図書館員の相互協力によって、充実した企画内容を提供することが可能となりました。さらに、宮城県図書館ボランティアの方々には会場案内やギャラリートークにもご協力いただき、単館開催では得られない貴重な経験を互いに得られたのではないかと思います。

また会場内には体験コーナーを設置する等の意欲的な取り組み効果もあって、地元小学校の実習授業に組み入れられるなど、幅広い世代への学習支援、生涯教育への刺激となる内容となりました。

さらに関連企画として、地域の民間企業の協力により図書館所蔵資料を基にした百周年記念御菓子の販売企画や、展示図録の販売を行うなどの多角的な取り組みもあって、本企画展はマ

スコミにも多く取り上げられました。観覧者からも概ね好評をいただき、大学の地域連携・社会貢献の一端を担う活動ができたのではないかと思います。



写真2：展示会場（せんだいメディアテーク5Fギャラリー）

【以下、アンケート結果（抜粋）】

良かった点等

『会場のレイアウトよかったです。見やすかったです。』（60代・他大学）

『大学図書館の企画展を公共施設で見ることができてよかったです。』（40代・一般）

『以前、東北大構内で開かれていた時より、会場が広く、途中休める椅子もあり、とてもゆったり見ることができてよかった。今回のようにまとまった資料をテーマ毎に区分してあるのは、数量からしても丁度よいと思った。』（30代・一般）

『幅広い分野をまとまりよく展示してあってよかった。案内も親切で体験コーナーも楽しかった。』（30代・一般）

『遊び心が随所にあって、楽しいひとときを過ごしました。』（60代・一般）

『パネルが楽しかったです。手にとって見られる見本がとてもよかったです。』（20代・他大学）

『見やすい展示で、見ていて飽きがきませんでした。楽しかったです。』（20代・他大学）



写真3：簡易レプリカ

『間近にゆっくり見ることができて、満足。説明文、説明板も洗練されていて、気持ちよく読むことができた。』(60代・一般)

『江戸時代の人の考え方への解説が、なるほどと思えて興味深かった。視覚的に大変楽しかった。東北大図書館まで足を運んでぜひ全て見たいと思いました。』(30代・一般)

『資料も豊富で解説も分かり易く、手にとって見られる冊子もあり...良かったです。何だか異次元のタイムトラベルをしたような、不思議な楽しい気持ちになりました。』(30代・一般)

『大変分かり易い展示で楽しめました。切り絵、なぞなぞなど途中で休みながら楽しめました。よくまとまっていると思う。』(70代・一般)



写真4：体験コーナーで学ぶ小学生

『貴重な資料の公開、また、その工夫がすばらしい。』(40代・他大学)

『展示物を見るだけでなく、参加型になっているところが何れ所かあって、とてもよかったですと思います。』(30代・東北大)

『とてもおもしろい展示でした。お金をかけず、季節を感じることでできる、楽しい生活してみようと思いました。』(30代・一般)

『私たちの生活に、いつしか消えてゆく伝統のあり方を考えました。』(70代・一般)

『歴史だけでなく文化に興味をひかれたのは初めてでした。』(20代・他大学)

『帰宅したらぜひ家族にも子供を連れて何うように話したいと思っております。』(60代・一般)

『とても楽しかった。思わず用事を忘れて十分見せていただきました。』(70代・一般)

『江戸時代は最大のエコロジーでありリサイクルであると思った。この考えを現代に生かしていかなければと改めて思うし、実行したい。』(50代・一般)

『気持ちがとてもおだやかになった。』(60代・一般)

『知らないことがあることを改めて知る。』(50代・一般)

『江戸時代への興味・関心が刺激されました。いい展示ですね。ご苦労様!』(50代・一般)

『期待以上に展示が充実していて驚きました。見入ってしまう書物ばかりで、とても面白かったです。』(20代・一般)



写真5：展示例

工夫すべき点等

『残念な事に昔の書体が簡単に読み下せません。今の書体で書いたものを傍らに置いていただければもっと楽しめると思います。』(70代・一般)

『文章部分が何を書いてあるか、説明があるとよいと思いました。』(30代・東北大)

『仙台での江戸時代の町人たちの暮らし、江戸

との比較などを知りたかったです。』(40代・一般)

『もう少しレプリカがあっても良いと思いました。』(40代・一般)

『落ち着いた展示方法でゆっくり鑑賞できた。参考として現存する実物も飾られてあればと思う。』(60代・一般)

『大学と県の共催の企画、大変よかった。できれば、仙台市博物館などともリンクできればもっとよかった。』(60代・一般)

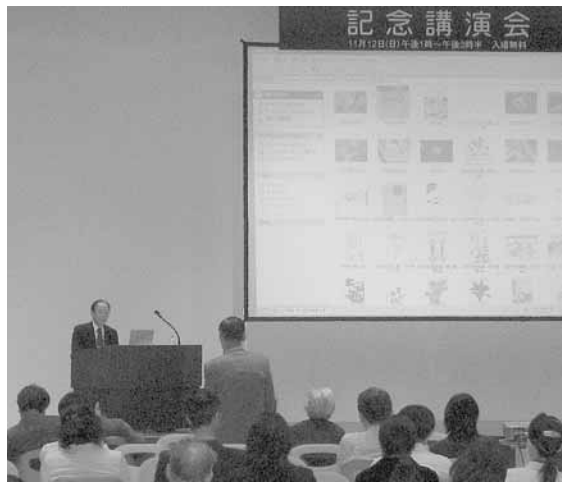


写真6：記念講演会（144名が来場し、質疑応答などの活発な市民交流が行われた。講師：江戸東京博物館の小澤弘氏、ランドスケープガーディナーの青木宏一郎氏）

要望等

『現在の若い年代に日本のすばらしさ、他国には見られない文化をもっと勉強する機会を与えてほしいと思います。』(50代・一般)

『すばらしい品々の保存が大変かと思いますが、興味のある方々、また今の勉強のために再々展示してください。』(70代・一般)

『地元（郷土）仙台に関する展示をもっとほしい。今後このような企画・展示会を続けて欲しい。』(60代・一般)

『テーマをよく表した資料ばかりで、見やすく、興味深かったです。資料の数、選び方、展示方法いずれも適切に思え、好感が持てました。大学を身近に感じました。今後もどんどん行ってください。』(20代・一般)

『仙台の大学、あるいは図書館に全国的にも珍しい誇れるものがあるとわかった。もっと公開したほうが良いと思う。』(40代・一般)

『入場無料でこれだけの資料を見ることができ、またパネルやキャプションも分かり易く、楽しめた。次回もこうした展示を期待したい。』(20代・一般)

『江戸のエコ、生活の精神的豊かさをもっと見習うべきと思っているので、このような企画を頻繁にやってほしいです。』(30代・一般)

『固有名詞すべてにふりがながついているので有難いと思いました。貴重な資料公開の回数を増やしてください。』(50代・一般)

『すばらしい企画です。大学の財産をより広く知らしむべく、知的刺激に期待します。』(50代・一般)

『とても面白く見ました。多くの人（特に子供や青少年）に見て欲しい展覧会です。』(50代・東北大)

『またくる日を、まっています。』(6歳・一般)



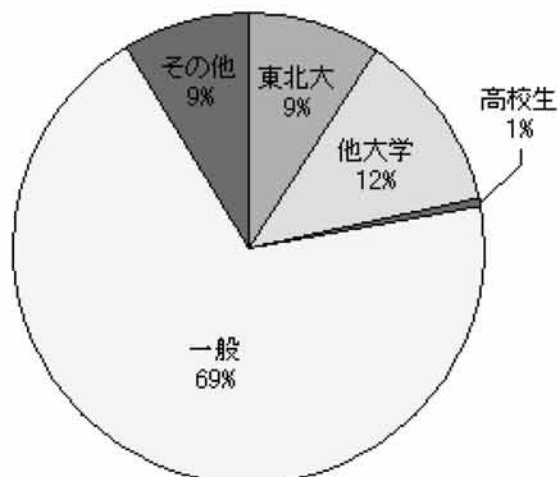
写真7：図録

東北大学附属図書館

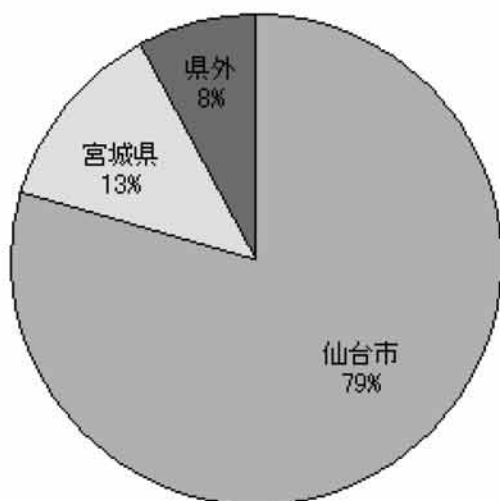
■来場者アンケート集計結果

(展示会入場者数：3,380人、アンケート回収枚数：324枚、回収率：9.6%)

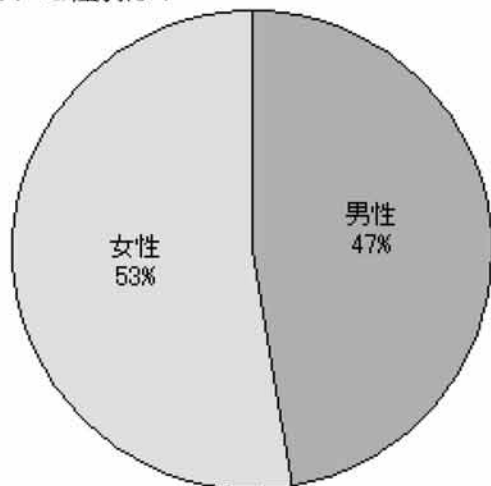
1. ご所属は？



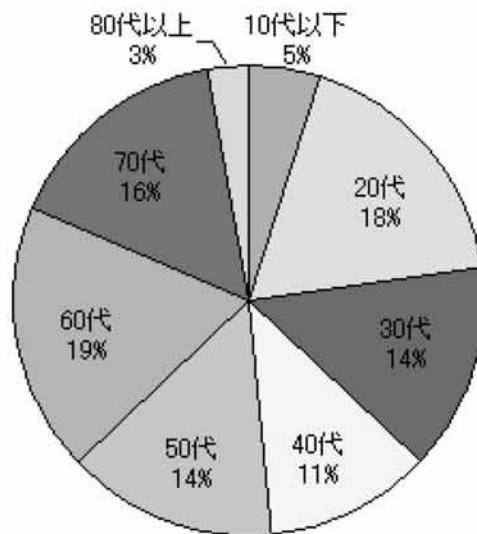
2. お住まいはどちらですか？



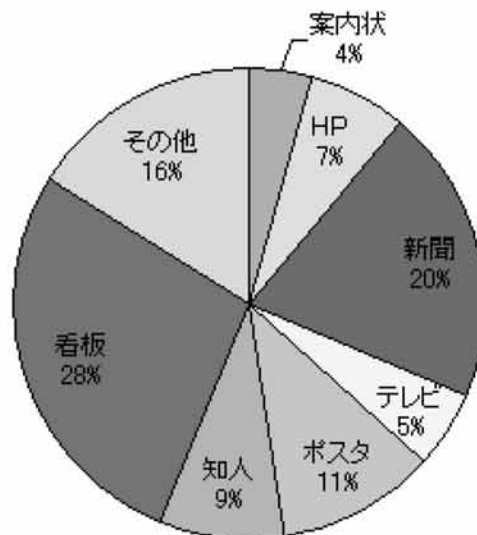
3. ご性別は？



4. ご年齢は？



5. この企画展をどこで知りましたか？



今回の企画展が無事成功裡に終わられたのも、共催・協賛・協力・後援いただいた皆様のご支援の賜物と感謝しております。また、なにより附属図書館関係全教職員のご理解があったからこそ成し遂げられた企画展でした。関係者にはこの場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございました。

(企画展WG)

東北大学創立100周年 / 宮城県図書館創立125周年記念事業 平成18年度東北大学附属図書館企画展「江戸の遊び」を終えて

宮城県図書館長 伊 達 宗 弘

現在、図書館を取り巻く状況は、財政状況を反映し大変厳しいものがある。このように状況が厳しければ厳しいほど、ますます図書館の果たす役割は大きいものと思われる。こういう時にこそ、職員一人ひとりが資質の向上を図り、中身の充実に努めることが大切である。

宮城県図書館では「22世紀を牽引する叡智の杜づくり事業」を展開している。その中の一つの事業として、本館展示室を会場に特別展示会と企画展示会を開催している。特別展示会は、テーマに基づき本館所蔵の貴重書を展示するもので、積極的かつ果敢なチャレンジ精神に負うところが大きい。一方の企画展示会は、職員の自由な発案を生かし、創意工夫に満ちた展示会である。これらの展示会により、職員は相互に触発し切磋琢磨している。このことが学習的職場風土の醸成にもつながるものと思っている。

11月3日文化の日、東北大学附属図書館と宮城県図書館の合同企画展の開場式が、厳粛かつ盛大に開催され記念すべき日となった。

県図書館としては、本館を離れての企画展は初めてのことである。その意味からも、今回の企画展は、東北大学附属図書館と県図書館が、お互いに協力し合いながら行う初めての試みで、県図書館としても大きな刺激を受け、教わることが大変多かったと思う。

ところで、日本人は農耕民族であったため、山河を敬い、真摯に山に向き合えば山も人に向き合い、岩に語りかければ岩もまた人に語りかけると信じられていた。大自然に限り無い畏敬や慈しみの念をいだき、大切にするすべを知っていた。そうした生活は、自然の移ろいや鳥の声、虫の声にも親しみをもち、その一つ一つの仕草にも心躍らせる豊かな感性を養うこととなった。

江戸時代になると、その豊かな感性は日本の芸術や文化の分野にとどまらず、日常生活のいたるところにいきわたり、素晴らしい日本の文化の基層を形成し、大きく華開くことになった。

芸術・文化の担い手は、市井の人びとであり、彼らは和歌・歌舞伎・茶道・華道などの芸術や園芸・囲碁・将棋の娯楽の分野等においても活躍し、影響を与え高度に昇華させた。そして、江戸の人びとの暮らしを楽しく豊かなものにしたのである。

今回の企画展のテーマは「江戸の遊び」- けっこう楽しいエコレジャー - であった。自然を大切にしながら、さらに素晴らしい文化を創造し興隆させていった江戸の人びとの多彩な姿を紹介することにより、現代を生きる私たちの生活や暮らし、環境との関わりについても示唆を与え、時宜に叶った内容であった。

思えば、展示スタッフにとっては、度重なる合同打合せ会議、企画分野ごとの打合せ、資料の撮影、展示会場であるメディアテークにおける設営・撤去、記念講演会場の設営等々、本当に多忙であったことと思う。もちろん、日常の業務を遂行しながらの企画展の仕事であり、それなりの苦労も多かったかと思う。

しかし、その結果、東北大学附属図書館と県図書館に勤務する職員同士の交流と切磋琢磨によりモチベーションを高め、充実した内容の合同企画展示会となった。来場者からの評価の声は、なによりの証拠であり成果であった。

また、県図書館のボランティアの方々には、会場案内やギャラリートークにも携わり、新たなボランティア業務を体験し、充実感を覚える絶好の機会にもなった。

なによりの県民にとっては、東北大学附属図書館と県図書館が所蔵する文化的・学術的に価値の高い、貴重な知的財産ともいえる資料を身近なところでふれる機会に恵まれた。

今後も、互いに積極的に交流・連携・協力し合い、合同企画展を継続・発展させながら、県図書館としては、職員の資質の向上を図り、質的機能をより一層高めていきたい。

(だて・むねひろ)

「もてなしの心」がこもる展示会：平成18年度企画展『江戸の遊び』評

附属図書館工学分館 米 澤 誠

はじめに

東北大学附属図書館主催・宮城県図書館共催の平成18年度企画展「江戸の遊び」(平成18年11月3日～14日開催)が終了しました。実施に関わらなかった筆者の目から見て、今回の展示会の最大の成果は、さまざまな年代の観覧者に、それぞれの知識や興味、嗜好に応じた展示の楽しみ方を用意したということにつきると考えました。

旧来の図書館展示では、古典籍を見開きで置き、読んでもよく理解できない長い解説文が添えられているという光景をよく見かけました。専門家ならともかく、一般市民に喜んでもらえる展示会にするためには、このような手法に問題があることは明白でしょう。

図書館展示で重要なのは、観覧の方々に喜び楽しんでもらうという「もてなしの心」をもって、観覧者の視点で展示物・展示方法を考えることだと思います。この評文では、今回の展示で「もてなしの心」が表れていると感じた展示上の工夫について、企画展スタッフ以外の視点から考察してみます。

1. 資料本文の翻刻(現代活字化)

江戸期の書籍の展示で最も鑑賞の妨げになるのは、「くずし字(変体かな)」で印刷されていることです。現代の多くの人々は、くずし字を読むことができません。資料に何が書いてあるのか知りたいが読めないというのでは、観覧者の知的好奇心を満たすことができません。

この展示会では、本文の見開きに書いてある内容を、翻刻パネルで示していました。こうすることで、観覧者もある程度くずし字をなぞって読むことができ、その資料がより身近になるものと思います。観覧者のために、翻刻の労を惜しまない気持ちが大切なのです。

2. 複製品の展示

通常展示物は、見開きの箇所しか見ることができません。彩色の図絵が数多く掲載されている資料などは、もっと他の部分も見たいと

思うのが人情ではないでしょうか。

他のページをパネルにして展示してしまうという手法もありますが、それよりも複製品を作成して、手にとって見られるようにするのが上策でしょう。この展示会の複製品は、図書館員が自作した簡易複製でしたが、それでも十分楽しめるものだったと思います。

3. 「質問にお答えします」

工夫して作成した展示解説も、観覧の方にとっては分からない用語を使っていることがあるでしょう。また、知識欲が旺盛な方なら、展示解説を読んでさらに疑問に思うことがでてくるでしょう。

この展示会では、会場に質問用紙を置き、いただいた質問に対する回答をすぐに掲示するという、インタラクティブな手法をとっていました。必ずしも質問をした方が再訪するとは限りませんが、疑問にすぐに対応するというもてなしの姿勢が感じられました。

4. 切り紙などの実演コーナー

展示というと、どうしても受動的に見るだけとなりがちですが、この展示会では大人も子供も手を動かして楽しめる、参加型の展示コーナーを用意していました。切り紙(紋切り型)、おもちゃ絵、はんじものなどを実際に楽しめるコーナーは、とりわけ子供たちに人気があったようです。

大人と一緒に来場した子供たちが、ずっと座って楽しんでいる姿をよく見かけました。また、大勢の小学生が来場し、みんなで楽しんでいる光景も見かけました。さまざまな年代に、江戸の遊びを実体験してもらいたいという気持ちが感じられました。



図1．実演コーナーで楽しむ小学生

5. 鉢植え

入口を入ってすぐの第1部展示場の中央に、見るものの心を和ませる鉢植えが2点飾られていました。宮城県図書館の伊達宗弘館長みずからが申し出て、何か月も前からこの展示会のために育ててきた植物ということです。

植物も美しかったのですが、鉢そのものも登米伊達家の伝統を偲ばせるような逸品でした。ここにも、お客様をもてなす心が感じられました。



図2．大文字草の鉢植え

6. 妖怪人形

会場の一番奥、第3部に置かれていた妖怪3体は、鉢植えとは違った意味で関心を集めていました。『姫国山海録』という写本にでてくる

妖怪をモデルに、東北大学の職員が作製したというこの人形は、東北大学内で展示したときから人気者だったのです。

古典籍などの書籍の展示の中に、このような立体的な展示物があると、会場全体の雰囲気華やかような気がします。また、大人も子供も展示を楽しむという気持ちにさせる点において、効果的なアクセントになっていると思いました。

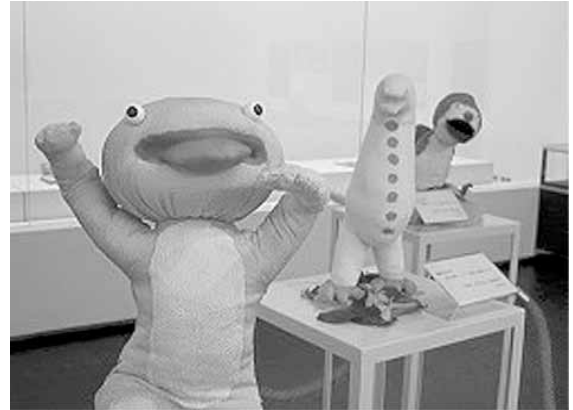


図3．人気の妖怪人形

さいごに

この紙面では紹介しませんでした。展示物や解説パネルなど、展示会全体のレイアウトやデザインも素晴らしく完成度の高いものでした。その内容は、図録『江戸の遊び』を見ればよく分かるでしょう。また、開催にあわせて販売した「漱石羊羹」の企画も、スタッフの優れた発想と実行力から生まれたものでした。

基本的な展示のテクニックを備え、さらにもてなしの心をもった展示を実現できる両図書館の企画展スタッフは、間違いなく日本の図書館界でトップクラスの知識と技術、そしてホスピタリティ（もてなしの心）をもちあわせた図書館員でしょう。これからも、社会に貢献する上質な展示会の企画・実施を期待したいと思います。

（よねざわ・まこと）

（本稿は、『叡智の杜：宮城県図書館紀要』掲載記事の再掲です）

連載「江戸の遊び～けっこう楽しいエコレジャー～」 を巡る話題から(1): 季節の楽しみ

情報サービス課図書館専門員 松 井 好 次

はじめに

今年の企画展は、東北大学創立百周年・宮城県図書館創立125周年記念事業の一つとして開催され、「江戸の遊び～けっこう楽しいエコレジャー」というテーマで、「季節の楽しみ」、「よむ楽しみ」、「みるきく楽しみ」、「あそぶ楽しみ」の4部構成とした。かつ「江戸の遊び」を人間と自然の共存というエコ(環境)の観点からとらえてみようとも試みた。来場者の皆様に変大好評であったので本誌面でも4回の連載で紹介する。



展示会場入口

まず、展示会場の入口に、両図書館長の挨拶のパネルと並べて、江戸の遊びの全体を俯瞰できるように、当時の有名な名所・行楽地、相撲などの興行が行われた寺院・神社、歌舞伎座などの場所を示した『大江戸観光案内図』を配した。

「季節の楽しみ」

現代の東京と比べて江戸の暮らしは、季節季節の節目がはるかにはっきりしていた。それは、商業の中心地であった日本橋から、好きな方を向いて1時間も歩けば、そこはもう長閑な田園地帯が広がっているというほど、市街地の範囲が狭く、自然に囲まれていたからである。

そこで第1部では、人間に一番身近な「季節の楽しみ」を取り上げ、それを 歳時記・行楽、

江戸の園芸・ペット、 仙台藩の行楽地の3つの側面から紹介した。



第1部展示会場

歳時記・行楽

江戸の春は、元旦の年始回りに始まり^{*1}、2月の梅見、3月の雛祭り、潮干狩り、そして無礼講の花見と続く。行楽の代表である花見は、旅行が自由にできなかった江戸っ子にとって、現代の我々以上に楽しみであった。花見の場所として人気があったのは、上野の山や隅田川の堤、飛鳥山、郊外では小金井などであった。しかし、上野には將軍家の墓所である寛永寺があったため、鳴り物や夜桜の禁止など様々な制約があり、庶民は思う存分楽しむわけにいかなかった。これに比べ存分に無礼講ができた隅田川はとりわけ人気があった。

夏は釈迦の誕生を祝う灌仏会、端午の節句、そして花火の大音響で夏の盛りの到来を告げる両国の川開きである。扇風機もクーラーもない江戸の庶民は、日が暮れかかると裏通りのここに出された縁台に集まり、夕涼みをしながら、うわさ話や縁台将棋を楽しんだ。また、夏は祭りの季節でもある。6月5日から14日にわたる神田明神天王祭、15日の山王祭、ほか赤坂氷川神社祭礼、佃島住吉明神祭礼等々目白押しだ。

秋は月見というほど、庶民にとって思い入れ

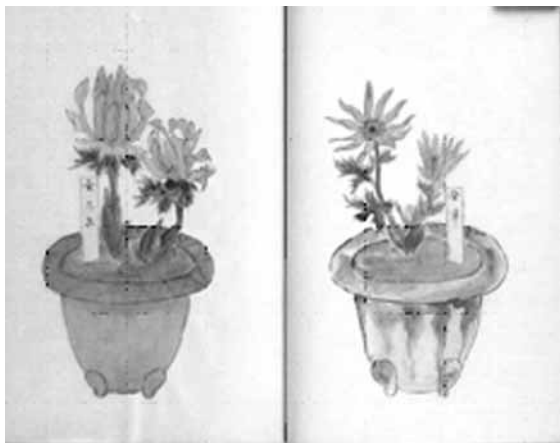
があった。8月15日の「十五夜」、9月13日の「十三夜」はいうまでもなく、7月26日の「二十六夜待ち」、8月16日の「十六夜」、17日の「立待月」、18日の「居待月」、19日の「臥待月」と呼び、愛でた。とりわけ江戸時代に月見として最もにぎわったのは、7月26日の「二十六夜待ち」で、月が出てくるのは夜中の2時頃なので、それを人々はどんちゃん騒ぎしながら待ち、夜更かしを楽しんだ。

もみじ、菊の季節が過ぎれば、もう冬の季節で、11月は歌舞伎の顔見世興行、鷲神社の西の市、12月の師走になると13日の煤払い、そして餅をついて新たな年を迎えた。

展示では、葛飾北斎『画本東都遊』、歌川広重『絵本江戸土産』、斎藤幸成編『東都歳時記』、斎藤長秋撰『江戸名所図会』、鈴木春信『絵本千代の松』などから関係のある図入りの部分を陳列した。

江戸の園芸・ペット

江戸の園芸の側面からは、福寿草や松葉蘭、朝顔などの紹介を行った。江戸時代、庶民の間では園芸熱が盛んとなり、さまざまな種類の植物が園芸品として育てられた。その中心となったのは、狭い土地でも育てられる鉢物である。時代により流行もみられ、一般には寛永の椿、元禄の躑躅、享保の菊、寛政の橘、文化の朝顔、文政の万年青、松葉蘭といわれている。



『福寿草図譜』

ブームとなった植物は、高額取引の対象とされた。寛政10年(1798)には珍品鉢植えの高価売買が禁じられるも高価売買はつづき、橘、万年青、松葉蘭、福寿草、セッコクなどは、まさに「金生樹」と呼ばれた。大阪に始まり江戸で広

まった園芸ブームは、文化・文政年間(1804-1830)に頂点に達し、葉形を競った橘が特に高値を呼んだ。一鉢の値段が100両(現代の金額で約1,000万円)というのはあたりまえで、1,000両を超えるものもあった。これらの植物の評価は、美しさよりも希少性が重視され、多くの奇品珍品が生み出された。

江戸時代、身近なペットとして飼われていたのは、猫、狎、ハツカネズミ、小鳥などで、とりわけ室内ペットの代表である猫は愛玩の対象としてだけでなく、ネズミ番としても大いに役立った。これに対し、犬は江戸の町に多いものを挙げたとき、「伊勢屋、稲荷に犬の糞」と言われるほど数は多かったが、全てが個人の飼い犬ではなく、地域の犬という認識のもと、町民から餌を与えられる犬(いわゆる野良犬)が多かった。犬は身近な生き物であったが、犬公方と呼ばれた5代将軍綱吉が貞享4年(1687)に「生類憐みの令」を出すと、お咎めの煩わしさから人々は犬との関わりを避けるようになり、ペット化はあまり進まなかった。狎は室内飼いの愛玩ペットとしてもはやされたが、当時は犬の一種ではなく、狎という別の動物として認識されていたようである。鳥類に関しては、見た目よりも鳴き声の美しさによって優劣が競われ、鶯、駒鳥、鶉などが好んで飼育されていた。鳴き声の優劣を争う鳥合わせの歴史も古い。夏の風物詩である金魚は「金魚玉」と呼ばれる風鈴を逆様にしたようなガラス製の容器に入れられ、軒などに吊り下げられ観賞されていた。展示では、園芸に関しては福寿草や松葉蘭、ペットとしては小鳥や金魚などに関する資料を取り上げた。

仙台藩の行楽地

ここ数年、企画展ではそれぞれのテーマに関し、できるだけ地元宮城もしくは仙台に係するものを取りあげることにしている。第1部では、「季節の楽しみ」に係するものとして江戸時代の仙台藩の祭りや名所旧跡に焦点を当てた。

祭りとしては、徳川家康を祭神とする仙台東照宮の祭礼をとりあげ、宮城県図書館の協力の下、県図書館所蔵の行列図や壇尻図を展示することができた。江戸時代は9月16、17日の両日が祭礼日で、この日は「仙台祭」と呼ばれていたという。現在のように祭礼日が

東北大学附属図書館

4月17日となったのは明治以降のことである。

名所としては、歌枕で有名な「宮城野」、多賀城の「沖の井(石)」、多賀城碑(壺の碑)、そして「松島」を紹介した。「宮城野」の紹介で展示した菱河師宣画『和国名所鑑』3巻3冊は、刊年が天和2年(1682)と今回の展示物の中で最も古い資料の一つで、これは宮城県図書館伊達文庫所収のものである。



『和国名所鑑』菱川師宣画

エコレジャー

今回の企画展のサブ・タイトルを「けっこう楽しいエコレジャー」としたのは、前にも述べたように、「江戸の遊び」をエコの観点からとらえてみようと考えたからである。

江戸時代、行楽や芝居見物に出かけるにしても庶民は歩いて出かけた。馬や駕籠を利用するのは高齢者か体の弱い人に限られていた。そして、伊勢参りなど特別遠方の物見遊山の旅以外は、ほとんどの目的地は江戸から日帰りできる範囲内であった。現代では、東京から車や電車を使わずに行ける行楽地や観光地は、きわめて稀で、さらに日帰りができるとなるとなおさらである。

また、園芸も地熱を利用するため土を掘った地下式の温室は利用されていたが、現代のような電気や石油で暖める温室はなかった。

このように環境共生型社会と言われる江戸時代の遊びは、必然的にエコロジカル・レジャーとなるわけであるが、楽しさという観点から見た場合、これらの遊びが現代の大規模なアトラクション施設や、大量のエネルギー消費を必要とする遊びに劣るとは思われない。なぜなら、ここに取り上げた「江戸の遊び」は、ほとんどが今でも残っており、「季節の楽しみ」に関するものだけでも、例えば行楽や観光見物、ガーデンング(園芸)は今でも盛んだからである。

今回の企画は遊びがテーマであることから、楽しい雰囲気伝えるため、絵が多く、見て楽しめる資料を中心に展示を行った。

おわりに

展示期間は11月3日から14日までの12日間であったが、入場者数が3,380人と前年の4倍以上となり、大盛況であった。アンケートの結果もおおむね好評で、江戸時代の「季節の楽しみ」を少しでも伝えることができたことを喜ぶ。今後も本図書館所蔵の資料の展示を介して、一般市民の方々にさまざまな文化を伝えていきたいと思う。

【注】

*1 江戸時代に使われていた暦は「太陽太陰暦」で、現在の「太陽暦」とはおよそ1ヶ月のずれがある。1月～3月が春、4月～6月が夏、7月～9月が秋、10月～12月が冬であった。

【参考文献】

- 1 佐々木俊介ほか編著『大江戸万華鏡』(人づくり風土記：全国の伝承江戸時代：聞き書きによる知恵シリーズ；13, 48) 農山漁村文化協会、1991. 12
- 2 松田道生『大江戸花鳥風月名所めぐり』平凡社、2003. 2
- 3 石川英輔『大江戸庶民いろいろ事情』講談社、2005. 1
- 4 杉浦日向子『お江戸でござる』新潮社、2006. 7
- 5 石田繁美編『家族で楽しむ 日本の行事とときたり』ポプラ社 2005. 8
- 6 棚橋正博『江戸の道楽』(講談社選書メチエ161) 講談社、1999. 7
- 7 竹内誠(監修)『ビジュアルワイド 江戸時代館』小学館、2002. 12
- 8 青木宏一郎『幕末・維新 江戸庶民の楽しみ』中央公論社、2007. 7
- 9 平野恵『十九世紀日本の園芸文化：江戸と東京、植木屋の周辺』思文閣出版、2006. 3
- 10 河北新報社宮城県百科事典編集本部編『宮城県百科事典』河北新報社、1982. 4
- 11 濱田直嗣『伊達の文化誌：続・東北の原像』創童舎、2003. 4
- 12 伊藤清次郎「維新前の仙台祭の話」(『仙台郷土研究』6(6)、1936. 3)

(まつい・よしつぐ)

アンケートへのご協力ありがとうございました

去る10月16日から31日まで実施した図書館利用者アンケートに対し、2,929件の回答をいただきました。これは、目標としていた東北大学全構成員の10%をはるかに超える件数で、皆様のご協力に対し、厚く御礼申し上げます。回答方法はWebによるものが2,388件、回答用紙によるものが541件で、身分別では教員が357件、職員が119件、大学院生が935件、学部生が1,518件でした。集計結果は、年度内発行予定の「自己点検評価報告書」で公表するとともに、改善要望については、その実現に向けて最善の努力をいたす所存でございます。

また、アンケートの広報に際し、多大なご協力をいただいた高等教育開発推進センターの関係者の方々、並びに各部局の事務の方々はこの紙面を借りて感謝申し上げます。

なお、景品については厳正なる抽選の結果、A賞のiPod nanoは文学部の学部生ほか4名の方が、B賞のUSBフラッシュメモリは多元研の教員ほか9名の方が当選されました。抽選風景は図書館のホームページ (<http://www.library.tohoku.ac.jp/>) に掲載しておりますので、ご覧下さい。

～こらむ～ つ・ぶ・や・き (3)

カウンターには色々な方がやってくる。レファレンス・カウンターは、謂わば相談窓口なので、図書等に関係ないような話も持ち込まれたりする。現在では世界中からの留学生がキャンパスに溢れているが、まだ受け入れ体制が充分ではなかった頃のこと。アジアのとある国からの留学生がやってきた。日本について研究しているという。文献の所在などの一般的な答えを聞き終えると、やにわに、妻の働き口を探してくれと言い出した。図書館では求人をしていないし、仙台で外国人が働いている風景もあまり見られなかったので、力にはなりたいたのだが即答できず困ってしまった。「自分の国は日本人から戦争で散々痛めつけられた。当然妻の就職の世話をすべきである。云々」と延々彼は語った。お話を伺い、ひとまず帰っていただき、周囲と相談のうえ指導教官に事情を話しご協力を仰いだ。先生からの助言がなにかあったのだろうか、その後カウンターには姿をみせなくなった。時折、生協食堂で口角泡をとばす勢いで演説するのをみかけたが、きっとお国に戻られ立派になられたことであろう。

最近、世界史の履修問題など騒がしいが、身近な国際交流にも歴史への認識を失ってはいけないことを学ばされたのであった。(かくいう筆者は、高校では世界史を選択したため、日本史は中学レベル。勉強しなくちゃ！)

(徒然子) 文責：工分及川

国立大学図書館協会理事会開催

平成18年度第3回国立大学図書館協会理事会が10月26日本学を会場として開催された。

会 議

学 内

18.10.5 平成18年度第5回附属図書館運営会議

・協議事項

- 1) 平成18年度総長裁量経費追加分について
- 2) 新分館の機能仕様案について
- 3) その他

・報告事項

- 1) 自己点検評価の進捗状況について
- 2) 学術情報戦略会議について
- 3) 国際シンポジウムについて
- 4) 国立七大学附属図書館長会議等について
- 5) 百周年記念展示について
- 6) キャンパス間資料搬送サービスの試行について(中間報告)
- 7) 秋の企画展「江戸の遊び～けっこう楽しいエコレジャー」について
- 8) 本館入退館装置の更新について
- 9) その他

18.11.6 平成18年度第6回附属図書館運営会議

・協議事項

- 1) 新分館の基本計画案について
- 2) 東北大学における学術研究推進戦略(案)への意見について
- 3) その他

・報告事項

- 1) 平成18年度総長裁量経費追加分について
- 2) 図書館構想検討プロジェクトの検討状況について

- 3) 学術情報戦略会議について

- 4) 自己点検評価の現状について

- 5) 11月6日以降の新体制について

- 6) 平山文庫の寄贈受入について

- 7) 私費による学内所蔵の文献複写提供について(試行)

- 8) 平成18年度秋の企画展(入場者状況)について

- 9) 国際シンポジウムについて

- 10) その他

18.12.11 平成18年度第7回附属図書館運営会議

・協議事項

- 1) 東北大学附属図書館規程の改正について
- 2) その他

・報告事項

- 1) 図書館構想検討プロジェクトの検討状況について

- 2) 中期目標・中期計画の平成19年度～21年度年度計画の素案作成について

- 3) 機関リポジトリシンポジウムの実施について

- 4) 平成18年度国立大学図書館協会東北地区協会事務連絡会議について

- 5) 平成18年度計画における附属図書館での実施状況について

- 6) 自己点検評価の現状について

- 7) キャンパス間資料搬送サービスの試行継続について

- 8) 後期試験期間開館時間延長の試行について

9) 経済学研究科からの文献複写学内搬送
要望について

10) 平成18年度企画展「江戸の遊び」につ
いて

11) その他

18.10.6 平成18年度第2回附属図書館商議会

・協議事項

1) 平成18年度総長裁量経費追加分につ
いて

2) 新分館の機能仕様案について

3) 平成18年度日曜・祝日開館経費(所要
額)案について

4) その他

・報告事項

1) 自己点検評価の進捗状況について

2) 学術情報戦略会議について

3) 国際シンポジウムについて

4) 国立七大学附属図書館長会議等について

5) 百周年記念展示について

6) キャンパス間資料搬送サービスの試行
について(中間報告)

7) 秋の企画展「江戸の遊び～けっこう楽
しいエコレジャー」について

8) 本館入退館装置の更新について

9) その他

18.12.21 平成18年度第3回附属図書館商議会

・協議事項

1) 東北大学附属図書館規程の改正につ
いて

2) 新分館の基本計画案について

3) 中期目標・中期計画の平成19年度～21
年度年度計画の素案について

4) 東北大学機関リポジトリ運用指針につ
いて

5) キャンパス間資料搬送サービスの試行
継続について

6) 後期試験期間開館時間の延長の試行に
ついて

7) その他

・報告事項

1) 商議員の交替について

2) 東北大学機関リポジトリ(TOUR)
の実施について

3) 平成18年度国立大学図書館協会東北地
区協会事務連絡会議について

4) 平成18年度計画における附属図書館で
の実施状況について

5) 自己点検評価の現状について

6) 平成18年度企画展「江戸の遊び」につ
いて

7) その他



人 事 異 動

平成18年12月31日現在

発令年月日	新 官 職	氏 名	旧 官 職	備 考
18.10. 1	事務補佐員(医学分館・整理係)	佐藤 尚美		採用
10.13		末 永 奈津子	事務補佐員(金属材料研究所図書係)	辞職
10.16	事務補佐員(金属材料研究所図書係)	小川 裕子		採用
10.18		佐藤 千春	事務補佐員(北青葉山分館整理・運用係)	辞職
10.25	事務補佐員(北青葉山分館整理・運用係)	千葉 悦子		採用
11. 6	図書館長	野家 啓一		再任
11.19		渡邊 愛子	育児休業開始(情報サービス課・参考調査係)	
11.30		尾澤 祐希恵	事務補佐員(情報サービス課・相互利用係)	辞職
12. 1	医学分館長	佐藤 洋		再任
12.18	事務補佐員(情報サービス課・相互利用係)	横田 靖子		採用

編 集 後 記

小春日和にゆったりと草を食る羊の群れ、彼方には山羊が日向ぼっこをしています。四季折々の木々に癒やされ、こののどかな風景もいつまで見られるのでしょうか？学部等の移転も間近になってきました。青葉山新キャンパスの新分館の姿も徐々にできています。

今秋は木這子にある企画展「江戸の遊び」を始めとして「国際シンポジウム」「リポジトリシンポジウム」「職員講習会」などあわただしく過ぎていきました。国際シンポジウムでは知る機会の少ない各国の職員養成プログラムなど直接耳にすることができました。大学図書館をとりまく環境等の変化や諸問題に積極的に取り

組み、専門性を持ち、柔軟に対応できる職員へと努力する姿を教えられました。

現在「キャンパス間搬送サービス」や「私費による学内ILL文献複写申込」、「オンラインレファレンスサービス」を試行しています。図書館サービスはかなり多様化しており、対応できるよう取り組んでいるところです。

今年の世相を表わす漢字は「命」、ひとつしかない命の大切さを感じた年でした。新しい年は希望に満ちた明るい年でありますよう祈念します。

最後にご多忙を極めるなかご寄稿いただいた皆様に心から御礼申し上げます。

東北大学附属図書館報「木這子」 第31巻第3号(通巻116号)発行日 平成18年12月31日

発行人 北村 明久 広報委員長 菅原 英一

発行所 東北大学附属図書館 〒980 8576 仙台市青葉区川内27-1 電話 022 795 5911, FAX 022 795 5909
URL <http://www.library.tohoku.ac.jp/> @